

女傑崩壊編 女將軍・遼華

第五章

究極の屈辱

翌日。

遼華が意識を取り戻した時、身体はすでに固定されていた。

仰向けに。冷たい石床の上に。手は頭上で縛られ、足首には金属の拘束具が嵌められていた。膝を曲げた状態で、大きく、M字に開かれた状態で。遼華の秘所が、完全に露わになっていた。

逃げられない。閉じられない。

その事実が、じわじわと遼華の頭に染み込んでいった。

どれくらいの時間、この姿勢でいるのかわからなかった。意識が戻る前から、すでにこうされていたのか。わからないまま、ただ開かれた姿勢でいる時間だけが積み重なっていた。その時間の中で、遼華の身体は奇妙な反応を示し始めていた。開かれていることへの意識が、秘所への意識に変わっていく。空気が触れる。灯りが当たる。誰かに見られることを、身体が待っている。

その自覚が、遼華には一番恐ろしかった。

そして——遼華の視界に、ルカがいた。

遼華の開いた脚の間に。お座りの姿勢で。膝を揃えて、手を膝の上に置いて、背筋を伸ばして。遼華の秘所を、正面から見る位置に座っていた。

ルカの琥珀色の瞳が、遼華の秘所を見ていた。

情欲に濡れた目で。しかし明晰に。すべてを理解した上で、すべてを享受している者の目で。遼華の露わな秘所を、一点の迷いもなく見ていた。

「……………」

声が漏れた。言葉にならなかった。ルカに見られている。この姿を。M字に開かれた、無防備な秘所を。遼華の顔が熱くなった。目を逸らしたかった。しかし拘束された身体では、顔の向きを変えることしかできなかった。顔を背けても、ルカがそこにいることは変わらなかった。

(…………ルカ…………見ないで…………こんな姿…………見ないで…………)

しかしルカの視線は、遼華から離れなかった。

遼華はルカの横顔を見た。かつて自分が知っていたルカではなかった。しかしルカは確かにルカだった。その明晰さは消えていなかった。ただそれが今は、快楽の側に向いていた。すべてを理解した上で、その場所に自分から座っていた。遼華がこれからどうなるかを、ルカは知っていた。知っていて、見ていた。

その事実が、遼華の胸を深く抉った。

老王が、部屋に入ってきた。

その気配だけで、遼華の身体が反応した。秘所が、じわりと潤んだ。老王の存在を、皮膚が覚えていた。身体が覚えていた。遼華はそのことを、泣きたいほど恥ずかしく思いながら、止める方法を知らなかった。

老王の双眸が、遼華を見た。

そして、口角が上がった。

「いい光景だ」

老王は遼華に近づいた。開かれた脚の間に立ち、遼華の秘所を見下ろす。灯りの下で、とろりと濡れ始めた遼華の秘所が、老王の視線を受けていた。

「よく似合っているぞ」

遼華の顔が、さらに赤くなった。

「……………」

老王の視線が、ルカに向いた。

「ルカ、よく見ておけ。お前の恋人の秘所を」

老王の手が、遼華の秘所に触れた。

「あっ………！」

大きな手だった。温かい手だった。その手の感触を、遼華の秘所は知っていた。指が入り口を探る。ゆっくりと。丁寧に。遼華の身体がM字の姿勢のまま震える。逃げ場がない。動けない。ただ老王の指が触れる場所を、全身で感じるしかなかった。

老王の指が、中に侵入した。一節分。

「あっ………！んっ………！」

中を探る。敏感な場所を見つける。くりくりと、刺激する。遼華の身体が跳ねようとした。しかし拘束が、その動きを制限した。逃げられない。ただ快感だけが、逃げ場なく積み上がっていく。

「あっ………！あっ………！あっ………！」

蜜が溢れ始めた。老王の指が濡れていく。老王はその指を遼華の秘所から抜いた。蜜で濡れた指を、ルカに見せた。

「よく濡れるな」

そして老王はルカを見た。

「ルカ、来い」

ルカが動いた。四つん這いで。遼華の開かれた脚の間に入ってくる。ルカの顔が、遼華の秘所に近づいてくる。深紅の髪が床に垂れた。琥珀色の瞳が、遼華の秘所を間近で捉えた。

遼華の双眸が、大きく開いた。

（……ルカ……やめて……）

「ルカ、遼華の秘所を舐めろ」

「……やめて……」

遼華の声は震えていた。しかしルカの舌が、遼華の秘所に触れた。

「あっ……!!」



ルカの舌の感触を、遼華は知っていた。かつて愛した人の舌だった。その感触の記憶が、遼華の身体の奥に刻まれていた。しかし今それは、老王の命令によって動いていた。遼華の知っているルカの優しさではなかった。情欲に飼い慣らされた獣の舌が、老王の意図の中で遼華の秘所を舐めていた。

「んっ……！ あっ……！ やめ……」

やめてと言いながら、身体は反応した。ルカの舌が、遼華の身体を知っていた。どこが敏感か。どこを触れると声が出るか。その記憶が、ルカの舌の動きに宿っていた。その精度が——かつての記憶を持っているからこそ——遼華の身体を容赦なく追い詰めた。

「あっ……！ んっ……！ あっ……！」

ルカの舌が、敏感な場所を執拗に刺激する。遼華の身体が、M字の拘束の中で震え続けた。逃げられない。動けない。快感だけが積み上がっていく。

老王の声が、響いた。

「いい光景だ。元恋人同士が、こうして愛し合っている」
遼華の双眸から、涙が溢れた。

（……ルカ……これは愛し合っているんじゃない……違う
……でも……）

でも——身体は嘘をつけなかった。ルカの舌が知っている場所を刺激するたびに、蜜が溢れた。快感が積み上がった。かつての記憶と今の現実が混ざって、遼華の頭の中で形を失っていく。

「あっ……！ あっ……！ はうっ……！」

ルカの舌がさらに激しく動く。遼華の内壁が波打つ。蜜が止めどなく溢れる。Σ字に開かれた秘所から。

絶頂が近づいてきた。ルカの舌で。老王に見下ろされながら。この屈辱的な姿勢のまま。遼華は唇を噛んだ。堪えようとした。しかしΣ字の拘束は、快感から逃げる全ての手段を奪っていた。動けない。逸らせない。ただ快感だけが来る。

「あっ……！ くるっ……！ やめ……やめてっ……！！！」

「あっ……！ あああっ……！！！！！」

絶頂した。

遼華の身体が激しく痙攣した。ㄤ字の姿勢のまま。ルカの舌の前で。老王に見下ろされながら。秘所が収縮する。蜜が溢れる。視界が白くなる。

（……ルカの舌で……絶頂した……老王様に見られながら……ルカに見られながら……）

涙が止まらなかった。

しかしルカの舌は止まらなかった。絶頂の余韻の中でも、動き続けた。

「あっ……！ はっ……！ やめ……もう……っ……！」

一度絶頂した後の秘所は、さらに敏感になっていた。ルカの舌の一動作が、鋭く刺さった。遼華の身体が拘束の中で跳ねようとした。跳ねられなかった。ただ快感だけが、収まる間もなく積み上がり続けた。

「んっ……！ あっ……！ またっ……！ またくるっ

……！！！」

二度目の絶頂が、一度目の余韻の上に重なって来た。遼華の嗚咽と嬌声が混ざり合う。涙が止まらない。声も止まらない。ㄥ字の姿勢が、全てを晒し続けていた。

ルカの舌が、さらに激しく動く。

遼華の秘所を、何度も舐める。

遼華の身体が、震え続ける。

「あっ……！ あっ……！ あっ……！ あっ……！」

快感が、積み上がっていく。

遼華の身体が、限界に近づく。

しかし――。

その時。

遼華の身体に、別の感覚が生まれる。

下腹部の、奥から。

圧迫感。

(……………!?)

尿意。

強い、尿意。

遼華の双眸が、揺れる。

(……………まずい……………)

ルカの舌が、さらに激しく秘所を刺激する。

快感と、尿意。

両方が、押し寄せる。

遼華の身体が、震える。

「あっ……………! んっ……………! やめ……………!」

遼華の声が、響く。

しかし――。

ルカの舌は、止まらない。

さらに激しく、遼華の秘所を刺激する。

遼華の尿意が、強くなる。

制御が、難しくなる。

遼華の身体が、震える。

「やめて……！」

遼華の声が、必死になる。

「本当に……やめて……！」

老王の声が、笑う。

「どうした？」

遼華の唇が、震える。

「……出て……しまう……」

遼華の顔が、真っ赤になる。

老王の声が、続く。

「何が？」

遼華の双眸から、涙が溢れる。

「……お願い……やめて……」

遼華の声が、震える。

「……本当に……出して……しまう……」

しかし――。

ルカの舌は、止まらない。

さらに激しく、遼華の秘所を刺激する。

敏感な場所を。

執拗に。

遼華の身体が、限界に達する。

尿意が、制御できなくなる。

遼華の双眸が、大きく見開かれる。

「やめて……………!!」

遼華の声が、響く。

「本当に……………出して……………しまう……………!!」

遼華の身体が、必死に耐える。

下腹部に、力を入れる。

括約筋を、締める。

しかし――。

ルカの舌が、さらに激しく動く。

快感が、遼華の制御を奪う。

遼華の身体が、震える。

「やめて……………!! お願い……………!!」

遼華の声が、必死になる。

涙が、止まらない。

しかし――。

老王の声が、冷たく響く。

「出せ」

遼華の双眸が、大きく見開かれる。

「……………!!」

「いや……………!!」

遼華の声が、響く。

しかし――。

ルカの舌が、さらに激しく動く。

遼華の身体が、震える。

そして――。